

令和四年二月三日(木)

新型コロナウイルス感染増のため、メール句会、オンライン句評会を実施。

兼題『梅』『節』

大津 そうかい

盆梅や玻璃戸を鳴らす湖の風

節介な叔母来る予感春隣

トロイメライ流るる校舎日脚伸ぶ

天風の戯れあやす奴風

号泣を無視さるる子よ春浅し

首藤 しずを

白椿もとは芸妓といふ女将

蠟梅や小さき町のうす明かり

春菜に削り節跳ね昼餉どき

組み上がる柱まぶしや春の鷹

枝先に梅一輪の潔し

斉藤 まさお

木曾川の流れ悠久盆の梅

節分や鬼を仲間に疫は外

永らへば禍もあり福も花すみれ

春めくやよちよち歩き姉を追ふ

武蔵野の土黒々と春近し

森田 元斐

冬終わる声殺しつつ鬼は外

籠り居の日々にあけくれ梅の花

精農の鋤整へる春立つ日

折節に悲喜を重ねて寒椿

寒月の独り占めする夜明け前

新田 ゆふき

春兆す老いの節目やGメール

湯に放つ寒に縮みし青菜かな

年越えてはやひと月の空青し

梅一輪見上げる空のやはらかし

春浅し夜の黙走る宅配便

中村 晃也

梅東風や兜太の庭に青鮫来

探梅行秀麗の富士真向いに

晩節を風に任せて枯れ蓮

侘び寂びを謳ふ贅沢古都の梅

陵は前方後円梅一輪

宮原 凧

手袋の片方ばかり春浅し

新しき塗箸おろす今朝の春

薄氷(うすらい)の風にゆらぎし光かな

道草のハミング軽し小春風

梅東風の仄(ほの)と吹き初(そ)む遍路道

長尾 進一郎

梅の枝の硬き雷と時を待つ

通るたび開きし梅に足止める

節分や鬼の着ぐるみアルバイト

初春の草色探す庭仕事

用も無く歩きたくなる春日かな

志村 良知

月残るラジオ体操息白し

蠟梅と並びてポーア家の主

咲き初めて一組だけの梅見宴

苑は静か孤独に咲きぬ緋寒梅

過激節消ゆ二ん月の西の空

安藤 晃二

アウトバーン駆く青空に樹氷揺る

梅一報震度五強の日向より

節分の豆打つ声や闇に延び

蠟梅や匂いの流れ雲光る

どうだんの根方に密か福寿草

内藤 あした

大寒の氷のやうな竹箒

ヴェネツィアのガラス飾る春めけり

波の華岩にからみて蠢きて

節分や目を白黒に豆の数

紅梅の日々に膨らみ朝まだき

高橋 由紀子

春きらら新装パン屋賑はひて

今朝の卓山に盛りたる新わかめ

節分や籠れる一年豆一つ

水温み川面に鳥の群溢る

背伸びして嗅ぐ梅の香や堀越しに

出澤 くれ竹 (見学参加)

寺古りて梅の木二本未開なり

今朝もまた丈を伸ばして垂氷かな

冬ざれや池に透ける金魚かな

黒土に麦芽千条整然と

冬虫や節くれ古木宿りけり

西川 知世

かつお節削る静かや寒の雨

早梅や母屋毀ちて家二軒

節分会愛嬌の良き鬼の面

大寒の鉄扉閉ざせる大使館

寒木に夕陽赤々纏はりぬ

次回は、令和四年三月三日(木)

兼題は、大津そうかいさん出題の『春の雪』

知世先生出題の『泥』です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

春の季語は、立春(二月八日ごろ)から立夏(五

月五日ごろ)までを原則としている。新暦で生活

するようになってから、また地球の温暖化などに

も影響をうけ、実際に肌で感じる季節感とは誤差

が広がっている。現代の立春のひと日は、季節感

を先取りしているようでもある暦と体感の誤差に

遊ぶのも俳句の楽しみと言えるだろう。立春は節

分の翌日のことでまだ寒さ厳しい日々が続いてい

る一日であり、我が身に引き寄せると、年齢と共に

春の訪れの遅々として進まずという感じが年々

して、暖かい日差しを待つ心は強くなっている。

旧暦では元旦に前後して立春があつたが、新暦

の現在では元旦と立春は一月以上もはなれている。

古句を鑑賞するには考慮にいれることが必要で

ある。「今朝の春」「今日の春」は立春よりも新

年の項になっている。

春立ちてまだ九日の野山かな 芭蕉

音なしに春こそ来たれ梅一つ 召波

ちくはぐの下駄から春は立ちにけり 一茶

雨のなかに立春大吉の光りあり 高浜虚子

さざ波は立春の譜をひろげたり 渡辺水巴

むらぎもの心に遠く春立ちぬ 大野林火

立春の月の早くもあがりけり 安住 敦

立春の雪白無垢の藁家かな 川端茅舎

立春の米こぼれをり葛西橋 石田波郷

立春の雪のふかさよ手鞠唄 石橋秀野

立春のその後の寒さ言ひ合へる  
はきはきと物言ふ子供春立ちぬ

石塚友二  
山田みずえ

長谷川素逝